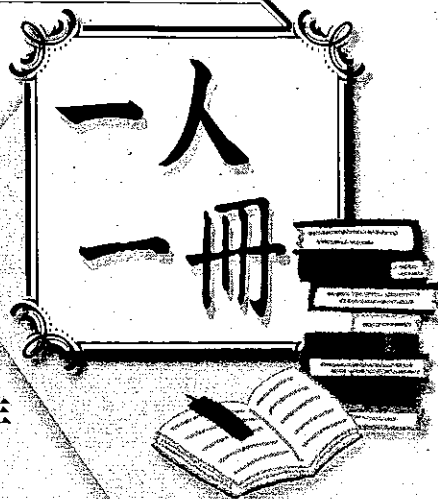


## 負債論 貨幣と暴力の5000年

デヴィッド・グレーバー 著

酒井隆史 監訳

以文社 (2016年11月) 6,000円+税 / 848ページ



評者



一橋大学大学院  
経済学研究科 教授

齊藤 誠

### 通貨の本質を見極め、 今後の可能性を探るヒントに

2011年に米国で発生したウォールストリート占拠運動の理論的支柱であったデヴィッド・グレーバーの大著を金融実務の専門誌で紹介するのは、荒唐無稽かもしれない。しかし、グレーバーのラジカルな議論は、実務家にも示唆に富むものではないだろうか。

『負債論』の最も重要な議論の一つは、信用と貨幣の歴史について常識を覆している点である。私たちは、「買いたい商品」と「売りたい商品」が一致しない物々交換の矛盾を解消する手段として貨幣が生まれ、貨幣経済の進展で信用が創出されたと経済史の教科書で習ってきた。しかしグレーバーは、「貨幣⇓信用」ではなく、「信用⇓貨幣⇓信用」であったことを鮮やかに示している。

信用を前提とした貸借は、文字が生まれる前からあった。例えば、春に種を借りた者（債務者）は、種を貸した者（債権者）に対して種の数量を示す印を付けた木片を縦割りにして一方の割符を渡す。秋にその割符が再び持ち込まれた債務者は、自らの割符と合わせて真正正銘の割符と確認すると、借りた分よりも余分に種を返す。しか

し、割符を持ち込んだ債権者は春に種を借りた相手と限らない。秋に返済が約束された割符は、交換媒体（通貨）として人々の間を転々とするからである。

こうした信用に基づいた通貨は、信用が崩壊する戦争期には通用しなくなる。紀元前6世紀ごろ、世界各地で乱世に突入して貴金属が貨幣となった。しかし、中世にベネチアで発展した銀行が再び信用を創造するようになる。当初、預金通貨は、銀行の金庫にある金銀に裏付けられた預託証書だったが、その後、将来のキャッシュフローを生み出す貸付という信用に裏付けられた証券となった。

こうして整理すると、近年の暗号通貨の発展との相似が見えてくるだろう。信用や仲介を徹底的に排したビットコインは、マニングで投下された膨大な計算資源に価値が裏付けられている点で、貴金属の希少価値に支えられた通貨と同じである。一方、リップル、イーサリアムといった次世代暗号通貨は、すでに投下された計算量ではなく、これから生まれるキャッシュフローを価値の源泉とする。信用と貨幣の二分法に従えば、次世代暗号通貨は信用を基軸とする有価証券として厳しい規制の対象となる可能性がある。

暗号通貨の本質を見極めるうえでも、本書は貴重な書籍なのである。